



IIAS NEWSLETTER

1998年11月発行

国際高等研究所

「けいはんな学研都市」

国際高等研究所は、「人類の未来と幸福のために 何を研究すべきか」を研究することを基本理念として、新たな学問の 創造・進展を目指す「課題探索型」の基礎研究を行っています。

すなわち、人類の未来と幸福にとって不可欠な課題を発掘し、その問題解決に向かっての研究戦略を展開する中で、学術研究における新しい研究の萌芽、或いは新たな学問の立ち上げにより広く世界文化の発展に寄与することを目的としています。

目次

- 「21世紀社会のビジョン」 - その実現に向けて - 沢田 敏男
 「環境と食糧生産の調和に関する研究」シンポジウム開催
 ノーベル物理学賞 文化勲章・秋の叙勲
 掲示板 今後の予定(10~12月) 最新研究報告(8~9月)

「21世紀社会のビジョン」

- その実現に向けて -

国際高等研究所 所長 沢田 敏男

関西経済連合会役員会が10月5日に関経連30F会議室にて開催され、
 高等研 沢田所長が「21世紀社会のビジョン」について講演した。(要旨)



人類の持続的発展を図るための21世紀社会のビジョンは“活力ある福祉社会の建設”ということである。かつて、臨時行政調査会(1981.4~1983.3)が、我が国の目指すべき目標として、国内的には「活力ある福祉社会の建設」、対外的には「国際社会に対する積極的貢献」を掲げて答申したが、このビジョンは、正当で適切なものとして再確認することができる。そして、このビジョンを実現するための基本的な理念として、

- (1) 科学・技術を振興するための創造の哲学
- (2) 資源の温存や環境を保全するための自制・抑制の哲学

この二つが必須の条件である。

人間疎外や環境の問題、また食糧、資源・エネルギー問題等の解決あるいは改善のためには、さらなる科学・技術の振興は不可欠であり、正に創造の哲学が希求される。それと同時に、人類は、万物の霊長として欲望や要求を抑え、資源・エネルギーの消費を節約するという、自制・抑制によ

る資源の温存と環境の保全ということを真剣に考えて取り組む必要がある。特に先進国では、これ以上の消費型社会の進行や拡大を抑止するために資源・エネルギーの温存システムを構築すべきだと考える。

すなわち、人類の持続的発展のためのキーワードは、「創造の哲学と自制・抑制の哲学」ではないか。この二つの問題を車の両輪とするような取り組みが肝要である。とりわけ、自制・抑制ということは、人類生存のために大切なことである。生物はその優れた属性で繁栄するが、滅びるのもまたその属性による。つまり、人類は脳で栄え、脳で滅びるともいわれる。しかし、人間の脳は本来促進と抑制の両機能を備えており、科学・技術をここまで進歩させた人類は、ちょっと立ち止まって反省することも知っている。この反省には一切衆生の仏教的倫理 自然との一体的調和の中に生きていこうとする仏教の理想主義的哲学が大切であると考えられる。

「環境と食糧生産の調和に関する研究 - 人類の生存の視野から - 」

シンポジウム「中国の食糧と環境問題」の開催

(9月11、12日)

高等研の課題研究「環境と食糧生産の調和に関する研究 - 人類の生存の視野から - 」の小シンポジウム「中国の食糧と環境問題」が9月11、12日に高等研で行われた。

日本の援助団体の研究者4人が現状と展望について報告。中国の食糧生産の潜在能力は大きい、それを引き出すには、貧困解消、環境保全と経済的インフラ整備が必要なが指摘された。

食糧の需給バランス均衡が課題

海外経済協力基金開発援助研究所、北野尚宏主任研究員は中国における省別の食糧需給バランスの現状を穀物別にとらえ、需給のバランスをとるための将来的な施策のあり方を提案した。

中国農業部農村経済研究センターとの共同研究の成果。中国全体の食糧需給バランスは95年の調査時点では2000年には消費が5億t、供給が4.8億tと2000万tの不足となっていたが、現状では97年に5億tの生産量を達成していることがわかった。

しかし、省別、穀物別でみていくと、需給のバランスにかなりばらつきのあることも指摘されている。例えば揚子江のデルタ地帯では都市化が進み、耕地が減少しているために食料不足の状態になっている。

一方、東北地域や雲南などの南部地域では供給が需要を上回っている現状だ。

全体的にみると、北部で食糧(飼料を含む)が余り、南部で不足している状態といえる。昔の中国は南の地方の食糧が豊か

北野尚宏主任研究員

かで北が不足していたために、北が南から食糧を調達していたということから南糧北調といわれていた。しかし、現在は北糧南調と逆転している。

この需給バランスの不均衡が中国国内の貧困問題の原因でもあり、バランスをとることにより、

貧困解消になる。また、食糧が無駄にされなくなるために国際的な食糧問題の解決にもつながるとされた。

そのためには、穀物のサイロ、冷蔵施設など長期保存施設や鉄道網や道路網などの輸送手段の整

備に力を入れていく必要性が強調された。

ハード面への援助から市場政策などソフト支援へ

国際協力事業団(JICA)国際協力専門員の富本幾文氏は中

国におけるJICAの農業、環境問題へのこれまでの取り組みとその成果、今後の展望を紹介した。

JICAの援助の重点項目は(1)貧困・地域間格差の解消(2)環境問題(3)農業開発と食糧供給(4)農産物流通関連インフラの整備と市場運営。

中国の年間収入600元以下の絶対貧困人口は約5000万人といわれ、貧困の原因は農業生産の地域格差と食糧供給にあることが明らかになっている。

そのためにJICAは中国北西部や南西部の貧困地域を重点に農民の所得向上につながる生産物

の加工技術などを指導。また、それらの生産物をもとにした郷鎮企業の育成なども行ってきている。また、食糧備蓄施設の建設や輸送インフラの整備などハード面の援助も積極的に行い、成果を上げてきている。



富本幾文氏

環境保全面では大気汚染防止、水質汚染防止など基本的な環境問題への援助が主であり、農業に関する環境問題への取り組みはこれからだとしている。

これからの援助のあり方としてはハード面への援助は持続的に行う一方で、貧困解消、食糧問題に対処するためには市場政策や農業政策などソフト面への協力が不可欠であることが指摘された。

農業の産業化を促進 - 6次産業の形成

国際開発センターの高瀬国雄理事は中国は広大な国であり、自然条件の多様化に合わせての農林水産業も多様である。そして、その多様性を生かした農業政策をとることが食糧問題の解決につながるとした。



高瀬国雄理事

中国の食糧生産の変化は穀類が減少したのに、牧畜が2倍近く増加。野菜も少し伸びている。しかし、最も成長しているのは漁業で、その伸びは5倍近くにもなる。これらの変化は食生活の変化にも対応しているが、中国が農耕地をうまく利用して食糧としてよく使われる淡水魚養殖を現金収入の道として導入したことが大きいとしている。

これらは自然の多様性を生かし、それぞれ適地適作的に行われている。しかし、かなり生産力には差があり収入の地域格差、ひいては貧困を生み出すもとともなっている。また、生産地と消費地の距離的な問題も大きくこれらを解消しないかぎり、中国の食糧問題の解決はありえない。

そのためには、地域において農・林・牧・漁の4部門（1次産業）が相互に協力し合うことで生活を支えていくことが重要である。これらの連携がうまくいけば、牧からでた廃棄物を農に利用するなど環境の保全にもつながる。さらに、生産物を加工（2次産業）する技術を導入すれば現金収

入が増え、流通（3次産業）させることによってさらなる地域の発展が保証される。

高瀬理事は1次産業+2次産業+3次産業=6次産業とし、農業が中国の市場経済政策のなかで6次産業を目指すことで食糧、環境、貧困問題が解決すると提言した。

中国側研究所との共同研究で成果を

農水省国際農林水産業センター生産部の野口明徳部長は日中の農業研究所が共同研究することにより、品種改良や病虫害予防などの技術開発を進め、中国農業の生産性の向上を図ることが重要であるとした。



野口明徳部長

中国における食糧、環境問題の認識は前3者と同一。解決策としては中国各地の農業科学院など専門の研究機関と連携して食糧増産などを目指すべきだとした。

特に水稻の病害虫の調査。稲遺伝子源を利用した品種改良、サイズの遺伝子源の評価と利用技術の開発や淡水魚の利用加工技術開発などが含まれる。

これらの研究には環境保全をめざすものもあり、ゼロエミッション農業のあり方を探る研究などもふくまれている。

さらにこれからの研究としては自然科学系の研究機関との連携だけでなく、社会科学系など経済や政策などを担当する部門との共同研究により、食糧、環境問題だけでなく貧困を解消できる総合的な農業政策を立案していくことも重要な課題とした。

さらに、中国ではこれから農業問題はエネルギー問題でもあるという点を強調した。特に北部の砂漠地帯の灌漑をはじめ北部地域の水問題は食糧、環境に影響を与える可能性が高いとしている。

ノーベル物理学賞

本年5月30日に行われた高等研フォーラム "Mott Transition and Carrier Doping"（代表：金森順次郎 大阪大学名誉教授 実行委員：福山秀敏 東京大学教授）にゲスト参加されましたRobert L. Laughlin氏 (Stanford Univ. Dept. Physics)が、ノーベル物理学賞を受賞されました。

ご報告いたします。



右からRobert L. Laughlin氏・福山秀敏 東京大学教授・金森順次郎 大阪大学名誉教授

文化勲章・秋の叙勲

本年度の「文化勲章」、「秋の叙勲」受賞者の
高等研関係者は右の通りです。
ご報告いたします。

文化勲章 岸本忠三（大阪大総長）：理事
勲二等旭日重光章
岡田節人（生命誌研究館館長）：学術参与
勲二等瑞宝章
藤澤令夫（京都大学名誉教授）：学術参与
藤原菊男（(社)京都工業会会長）：理事

掲示板

今後の予定（会場は原則として高等研）1998年11月～1999年1月

月日	プロジェクト名	オーガナイザー
11月4日（水）	「生命体の多様性」第8回研究会	岩槻邦男 (企画委員/立教大学理学部教授)
11月7日（土）	IIASフェロー公開講演会 「天災をどう考えるか」-自然の災害と恩恵-	巽友正(京都大学名誉教授)
11月12日（木） ～14日（土）	「言語の脳科学」第9回国際シンポジウム	乾敏郎 (企画委員/京都大学大学院情報学研究科教授)
11月13日（金） ～14日（土）	「科学の文化的基底」第7回研究会	伊東俊太郎 (特別委員/麗澤大学比較文明研究センター所長)
11月13日（金） ～14日（土）	「IIASフェロー研究会」セミナー	巽友正 (IIASフェロー/京都大学名誉教授)
11月14日（土）	「情報市場における近未来の法モデル」シンポジウム	北川善太郎 (国際高等研究所副所長)
12月3日（木） ～5日（土）	「生命体の多様性」国際シンポジウム	岩槻邦男 (企画委員/立教大学理学部教授)
12月6日（日）	「臨床哲学の可能性」第3回研究会	野家啓一 (企画委員/東北大学文学部教授)
12月12日（土）	第15回人類の自己家畜化現象と現代文明 学術公開講演会「現代人はどこまで"家畜"か - ヒトの現状と未来を考える -」	尾本恵市（国際日本文化研究センター教授）他
1月9日（土）	第16回人類の自己家畜化現象と現代文明 パネルディスカッション「ヒト・コードモ・ペット - 世紀末から未来を探る」	尾本恵市（国際日本文化研究センター教授）他
1月22日（金） ～23日（土）	「科学の文化的基底」第8回研究会	伊東俊太郎 (特別委員/麗澤大学比較文明研究センター所長)
1月24日（日）	「臨床哲学の可能性」第4回研究会	野家啓一 (企画委員/東北大学文学部教授)

最新研究報告：1998年8月～11月

分類	タイトル	発行	プロジェクト名	著者・代表者
IIAS Report	The Third Workshop on Orders and Structures in Complex System	1998.08	複雑系の秩序と構造	Gohara,K.
報告書	宇宙開発事業団委託業務成果報告書（平成9年度）	1998.09	宇宙開発事業団受託研	
IIAS Report	The Fourth Workshop on Orders and Structures in Complex System	1998.11	複雑系の秩序と構造	Yoshida,Z.

お問い合わせ

国際高等研究所



International Institute for Advanced Studies

編集・発行 / 国際高等研究所

〒619-0225 京都府相楽郡木津町木津川台9-3

TEL: 0774-73-4001 FAX: 0774-73-4005

http://www.ias.or.jp/ e-mail: www_admin@ias.or.jp